

知恩院宮門跡御殿の組織

——第二代尊光法親王時代について——

江 島 孝 導

序

ここに取上げる『東山門室記録』(以下『門記』)は、第二代知恩院宮門跡尊光法親王に随侍していた坊官岩波少進延庸による記録である。知恩院宮門跡は、元和条目第一条にも見られる様に、その門領の石高千石を知行として宛てられ、知恩院山内にあつて、独自に別の組織体を構成していた。知恩院所蔵の日鑑・書翰中にも宮門跡御殿としての記事が散見するが、それらはいづれも知恩院方丈側の役者である六役・山役が見聞できた範囲を越えていない。また井川定慶氏の手にかかる『知恩院史』(以下『知史』)においても、宮門跡の項目は取り上げられているが、それは七代に亘る法親王の系譜とその簡単な事蹟を語るのみで、その内部組織についてはあまり語られていない。

では知恩院山内の塔頭に並んで設立された宮門跡御殿の内部の人物構成はいかなるものであつたのか。『門記』の記事により、その人員構成及びその系譜と役割を辿るのが今回の作業である。

まず『門記』の成立過程を論じ、つづいて『門記』中に抽出された組織の構成メンバーである「院家」「坊官」「家老」「僧衆」「小姓」「侍」「下部」「医者」を各論として、その役割をも含めて論じてみたい。時代は第二代

尊光法親王の時が中心である。

一

『東山門室記録』の概要を述べると、二冊から構成され、筆者はそれぞれ異なり、第一冊目は墨付九十二紙、第二冊目は墨付七十九紙である。共に表題は無いが、その序の中に「名曰東山門室記録」とあり、今はこの名称に従って『東山門室記録』と呼ぶことにする。内容は知恩院宮門跡初代良純法親王（以下「良純」）の事蹟が墨付にして二紙であることから、その殆んどが第二代尊光法親王（以下「尊光」）に関するものと言える。良純についての簡単な事蹟の中にも坊官の事が載せられ、これは知恩院史にとっても初見であるので後段の坊官の項で記述するが、示唆に富むものがある。尊光については、その誕生から延宝二年（一六七四）十二月に至る迄の事蹟を載せる。『門記』は歴史的な観点から知恩院を述べる上で、これまで使用された事がなかったのではと思わせる程、実に良質な記録なのである。

その序文は『門記』の書かれた由来を知る上で重要であるので、その全文をここに引く事にする。

序

四時代謝、万物變化、古往今来、有興有廢、々□必興、蓋是天地自然之常理也、本山知恩門室、雖權輿于後陽成院第八皇子二品良純親王、因事而廢之、虛_{（イ）}庸年已尚矣、厥後、後水尾院第八皇子二品尊光親王、当中興之運、出于北闕、入東山、再開門室、弘日増光、宗門向榮、公武帰敬、四衆景仰、嗚呼法運有数、一入泥洹、亦虚_{（イ）}庸、既歷一十九年、天和上皇第十一皇子、重繼門室、起其洪業、至今三世、其中間八十余年、採厥有、闕門室之事者、編集已成、名曰東山門室記録、都慮三十卷、藏諸匱、以俟後覽之添削、且備温故而知新之便覽也、予寸舟、若孤、後來有統之者、伝盛衰、於千万世、此外亦何求、因以為之序、

元禄十一年龍集 戊寅臘月穀日

知恩門室

坊官岩波帥法印延庸

行年七拾歳謹誌

この記載によると、元禄十一年（一六九八）十二月に、知恩院門室の坊官で、帥法印の官位を持つ岩波延庸が七十歳の折に書いたとされる。

『知恩院史料集』（以下『史料集』）によると、元禄十一年八月十四日尊統法親王が第三代として相続決定するが、それに先立つ同年四月二十五日付の知恩院役者より増上寺役者への書翰によると、院家・坊官と知恩院役者との往復がうかがわれる。さらに、宝永三年（一七〇六）十月二十五日の日鑑には、「尊光親王御得道・御入室之節之様子、書付を以、宮様坊官中へ相尋候へ共、年旧キ事故、覚不申候、旧記、御文庫ニ可有候由、被申候事」とある。尊光入室は明暦二年（一六五六）五月八日で、この宝永の折の記事は五十年後に記されているのだが、坊官は古い話だから知らない、しかし旧記は御文庫にある筈と言う。この『門記』が、ここで言う所の旧記にあたるのかを断定することは出来ないが、元禄十一年坊官に対する役者よりの問合せに対し、その当時の坊官の上役の位置にある岩波延庸が志願して書き留めたのではないかと思われる。

次に問題となるのが『門記』の筆者である。この各冊はあきらかに異筆である。序文と同じ筆致が一冊目全てに亘っており、寛文六年（一六六六）からの二冊目は、一冊目とは違って実に流麗な文字で書かれている。

延庸は、序文中にすべてを録すること三十巻、諸匱に蔵す、と書いており、この『門記』なるものは、宮御殿の蔵に納められていたものと考えられることも出来、その全文が完成していたものと思われる。延庸は元禄十一年当時、帥の法印と自らを名乗るごとく、坊官としての長老であり、その下書きが既に存在しており、後段を他者に託したのでは

なからうか。延庸は、『史料集』にその名前を元禄十三年まで檢索出来、さらに翌十四年にも「坊官二人」とあり、蘭宮内卿と共に存在していた。その後、宝永二年には岩波靱負の名が見られるが、これは明らかに別人で、この間に世代が交替したか、或いは亡くなったのかのどちらかと思われる。七十歳の延庸自身が筆を執り、何らかの理由で、後段を他者に託したのだろう。残念乍ら、現在に至るまで、知恩院内に延庸の自筆文書は発見されていない。それ故、前段の筆致についてすら断定は出来ない。

そこで次に、その内容の信憑性を判断して見たい。それは尊光の叙二品の件についてである。『知史』には延宝七年（一六七九）十一月十日二品に叙せられるとされる。他にも『本朝皇胤紹運録』（以下『紹運録』）や『統史愚抄』も共に、この説をとる。しかるに、『門記』では寛文五年（一六六五）七月十二日のこととする。その日、妙法院宮堯恕・聖護院宮道寛と共に、三名が同時に二品に叙せられたとある。『紹運録』『統史愚抄』共に、他の二人には確かにその日付で叙せられたとされる。別の『詰所系図』では三名共に同日付とされている。

寛文三年より書継がれる『堯恕法親王日記』（以下『妙法院史料』）によると、寛文五年七月六日付の記事中に知恩院坊官と妙法院坊官との往復書翰が引かれている。長文であるが、ここに引用する。

六日、口上云、今度聖護院殿入峯ニ付、二品被仰上候よし、一昨日從聖門主申来候、左候ハ、予儀上首ノ事ニ候間、一同ニ申上候間、披露たのみ入候よし申遣早、知恩院門跡ヨリ飛脚到来、状云、

態以飛脚令申候、今度聖護院御門跡就御入峯、二品被仰上度思召、当門へ頃御届被遊候、依之吉良若狹守殿迄御内談被遊候処ニ、則自彼方伝奏衆迄御状被遣候、其様子ハ知恩院御門跡之御事、当地被成御座候間、其許ニ而被叙二品儀、御次第之通御肝煎被成可被進候、若又当地被成御座候而者、其儀如何數御座候、先此度之聖護院御門跡御奏聞之儀、御延引可然候敷被仰遣候、加様ニ御座候得者、当門二品之儀、若此度勅許も可有御座哉、左様ニ御座候得者、其御門跡様被叙二品候も、永々御在江戸之儀御座候得者、不聞召候故、為御断各迄、此等

之趣、可申入之由御意候、恐惶謹言、

六月廿九日

岩波少進 延庸判

武田玄了法眼 永乾判

菅谷左京様

返書云、

御飛札之通、令披露候、抑今度聖護院御門跡御入峯故、叙位之儀、被仰上候ニ付、其御門主へ御届候ニ付、当門へ被仰談候通、御念入、遠路御届之段、御満足不残思召候、(原文ノマ、残カ)当門主ニもまた不叙二品ニ付、聖護院殿よりも御届候故、法皇様へ被得御内意、今日職事迄被仰入候よし、御念入候御届御満足ニ思召候、此等趣、可然様ニ御披露可有候、恐々謹言、

七月六日

菅谷左京

武田玄了様

岩波少進様

一方『門記』では、同年七月六日付の書状が載せられる。文面に少し異同があるので引用しておく、

御飛札之通、令披露候、抑今度聖護院御門跡様御入峯故、叙位之儀、依被仰上、其御門跡様へ御届御座候ニ付、当門へ被仰談候、遠路御届之段、御満足不浅思召候、当門未被叙二品候故、從聖護院様御届御座候、則法皇様へ被仰御内意、昨日職事迄被仰入候、被為入御念候御届、御満足ニ被思召候、此等之趣可然様ニ御披露被成被進候様ニ可申入旨候、恐惶謹言、

七月六日

菅谷左京

武田玄了様

となっている。六月二十九日の書状については「右之首尾ニ付、大覺寺御門跡・妙法院御門跡、二品転任之事、無御存知故ニ為御届、從玄了・少進方、兩門坊官中へ飛札遣ス矣、但此草案紛失故、此ニ不記矣」とある。道寛が七月二十五日入峯するにあたって急拠二品に叙せられる様にと嘆願する事から、その上座である知恩院・妙法院に對し伺いをたて、結局三名共に同日付で二品に叙せられることになったのである。残念乍ら六月二十九日付書状が『門記』にはないが、七月六日の文面は、文体に多少の異同が見られるものの、大概同文と考えて良い。この様に、全く別の組織に属する坊官が、それぞれの目的の為に書き残したという意味において、この書状が『門記』の信憑性を高めた事は確かである。『門記』は充分に信頼するに価する良質の記録と言う事が出来、又知恩院宮御殿の側にたった一側面を我々は『門記』をもとに知ることが出来るのである。

さらにもう一点補足しておく、『清閑寺熙房卿記』(以下『卿記』)にも寛文五年七月の条に「十二日、妙法院宮無品親王堯恕、尊光・道寛、被叙二品、職事資廉」とある。この記載の形式を他の例で見ると、宮門跡には「妙法院宮」の如く必ず小さく添書があり、この文中では、「知恩院宮」も「聖護院宮」も添書がなく、しかも尊光の上は一字關字になっており、「尊光道寛」が一つの様に書かれている。言うまでもなく寛文五年七月十二日、同日付で三人が二品に叙せられたのは事実であり、『門記』の信頼度を高めた事になる。

『門記』を以上のように評価しておきながら、本論文においてはその内容にまで立ち入らなかつた。まずその登場人物から明らかにされる宮門跡御殿(以下「御殿」)の人員構成を整理・把握しておきたかつたからである。『門記』中に御殿全体の人員構成を示唆する記事は少ない。「坊官・家老・小姓・侍中・僧衆・下部」と一般名のみで六者が抽出されるのが一ヶ所、「院家・坊官・家老」と一般名で三者が抽出されるのが三ヶ所、「院家・坊官・家老・小姓」と四者の名が抽出されるのが一ヶ所のみである。そこで一般名をもう少し抽出補強する為に、時代は下るが、宝曆五

年（一七五五）十一月に第五代尊峰法親王が関東に下向する折の、行列供奉の人数に関する覚書を引用してみると、
知恩院宮、今度関東江御下向、召供人数之覚、

御児

貞丸

坊官

蘭宮内卿

同

松室大進

諸大夫

樫田志摩守

御側用人

蘭大学

同

梅嶋頼母

六役

長香寺

山役

既成院

医師

長沢柳庵

御近習

拾人

中小姓

五人

表侍

拾老人

茶道

貳人

足輕格又者共

三拾九人

下部又者共

七拾四人

となっている。総勢百五十名の行列である。この内六役・山役は知恩院方丈側の者である。また諸大夫・御側用人は家老に比せられる。他に御児・医者・御近習・中小姓・表侍・茶道・足輕格・下部となっている。御児はやがて院家

となるが、この段階では得度して居らず、得度ののち覺了院を名乗るのであるが、今はその経過を論じる事は出来ない。^②

この『門記』での名称と行列の次第の人員構成を勘案して、院家・坊官の二者を各項に、それ以外の家老・侍中・下部・僧衆・小姓・医者を一項にまとめて、これらの三項目にわけて『門記』よりの抽出を行い、出来得る限りその承譜・役割を述べて見ることにする。

二

御殿においては門主について第二位に位置する院家の記事から見ている。『京都御役所向大概覚書』によると、正徳五年（一七一五）当時、門主は無住で院家は覺了院とされる。『門記』で覺了院の名が確定するのは、寛文七年（一六六七）の事である。

では、覺了院以前に知恩院に院家は存在していたらどうか。「院家」とだけ書かれている記事が二ヶ所出てくる。

明暦三年（一六五七）正月六日、京都門中が御殿に年頭の御礼に来るが、御祝儀の受取役として「院家、或ハ坊官取伝ヘ頂戴之」と記される。又万治二年（一六五九）正月一日・二日・三日の記事中に見られる。一日の条には門主出座の折「院家・坊官ヘ御前ニ而祝之」とあり、「其後御雑煮出ル、院家有時者、御相伴也」とある。二日・三日の両日についての条には、院参にあたつて本山方丈につづいて「次者院家、或ハ坊官・御手長行者同前、自是毎年如斯矣、自丈室院家・坊官ヘ有祝儀也」とある。これより毎年かくの如しとあつて先例を記す文体である。先例を示す「これより以後」という語は、『門記』の中に頻繁に出てくる。尊光は明暦二年には入室しているので正月行事のあり様の通例を記したようである。すなわち延庸自身は覺了院の得度以後、院家のあり方を経験しており、この様な記事を書くにあたって先例となりうる最も始めの段階においてさえ、院家がある時には、という観点にたつて書留めた

ものと思われる。雑煮の文にそれがよく出ている。坊官は門主の相伴はしないが、院家が存在する時は、その相伴をする^①と記すのである。これにより覚了院以前に「院家」と記す文はあるが、寛文七年以前に院家は存在しなかったと考えて良い。

さて覚了院なる人物について調べてみよう。寛文四年（一六六四）十一月の条に「内々院室御取立被成度、從被思召、吉良へ有御内談而、則大炊御門左府經孝公ノ末息、可有入室受戒、内通也」とある。大炊御門經孝は、當時前右大臣である^②。經孝が左大臣になるのは寛文十年であり、この官位は誤りである。しかし經孝は寛文十年以後、天和二年（一六八二）没するまで前左府と呼ばれており、延庸は御殿における院家覚了院の権威づけの爲にも、あえて左府と書いたのではないかと考えられる。

次は入室の記事で、寛文六年（一六六六）三月二十八日条に、「内々御契約之通、大炊御門左府經孝公ノ末子、梅丸、為院家入室、被初參、則若王子誘引也、則有御祝儀也、但此若王子者、經孝公ノ猶子也、加之門主ノ御袋ノ御祈禱所故、如斯矣」とある。梅丸のちの覚了院が御殿に入室する。この件が成就するに至ったのは、若王子の力によるもの^③だとかかれている。若王子は聖護院門跡の院家であり、名は晃海權僧正である。『卿記』によれば、寛文五年三月五日「若王寺法印晃海・晃玄等任權僧正、職事貞光」とされ、当時權僧正であったことがわかる。門主の御袋とは、尊光の母權中納言局のことであり、若王子はその祈禱所であった様である。

次に門主より得度を受けるが、寛文七年閏二月二十二日のことで、「梅丸得度、門主御戒師也、院号者、從法皇被号覚了院、字者超孝、但超者、門主誓号之字、孝者、慈父之名乘字也」とある。この記事につづいて得度の次第・図が書かれる。ここに名実共に、院家である覚了院が、御殿に登場することになる。覚了院は享保十八年（一七三三）七月二十五日に遷化するまでの六十六年間の永きにわたって、御殿を守ることになるのである^④。

院家覚了院として、早速寛文七年三月二十七日、尊光二度目の修学の為の関東下向に随侍することになる。同日の

記事に院家は登場しないが、四月十五日の条に「御登城、御進物（中略）、御台様へ（略）、覺了院初而御礼、杉原十帖巻物一本、少進・民部・頼母各屬五本入箱、御礼如例矣」とあり、覺了院は四代將軍家綱に初めて拝謁するのである。『徳川実紀』（以下『実紀』）にも見える。翌八年五月四日坊官延庸と共に覺了院は京に戻る。「院家・少進、位階為奏聞、御暇、上洛ス」とあり、位階奏聞の爲であり、五月十七日にその願を出し、六月二十七日勅許されるに至る。五月十七日条には「覺了院、今度始而位階、直叙ノ法眼、并少進、次第ノ法眼、從門主鷹司房輔公・伝奏飛鳥井雅章正親町実豊・職事柳原資へ、廉朝臣へ、以少進被仰入也」とあり、つづいて五月二十六日には覺了院だけが「院家者、若王子権僧正晃海同道而、右之四家へ被参、但関白・両伝奏へ者十帖一本、為土産也」として、若王子を伴つて、関白・両伝奏・職事方へ出向く。翌六月二十七日「院家・坊官、位階勅許也」とある。覺了院にとっては始めての位階である。直叙とあるので、これが最初であり、覺了院は法眼位より始まったことがわかる。又岩波少進は、次第の法眼とあるので、法橋より次第してという意味で、今回法眼位に昇進したのである。翌月七月五日、覺了院が始めて参内する。「院家参内、若王子同道也、（靈元）（後水尾）（明正）（後西）（東福門院）裏・仙洞・本院・新院・女院・女御、何モ十帖一本、長橋ノ局・勘解由小路ノ局・新大納言ノ局・宣旨局・綾小路ノ局・刑部卿ノ局、何モへ小高一束宛持参矣、惣而院室ノ官礼、法印迄者、進物ノ例雖希有、官室共ニ今度初メテ故、此度計可然由、若王子依差図、然ドモ関白・伝奏へ者無進物矣、職事へ者百疋引一束被持参乎」とある。若王子晃海の同道にて初めての参内を果した覺了院であるが、実は法印位以下のものが参内進物する例は、極めて稀な事だと言う。若王子の差図で参内が果たせたのだとする。同七月九日条「口宣・宣旨、両通共ニ調、参官務、從院家百疋被送之也、但宣旨者、雖不及儀、一度請置宜也」とあり、又々普通宣旨が調ったからといって官務への御礼は必要なしというのに百疋を送っている。

同八年（一六六八）十一月二十八日、江戸学寮の移徙の御祝儀に、増上寺方丈他、源意や役者に料理が出るが、覺了院が相伴している。

寛文九年（一六六九）一月一日条には「御内祝儀、如例、辰ノ刻迄、礼者へ御対面、然処ニ自方丈、礼者へ御対面、必ス可為御無用之由、就被申上」とあり、それまでは門主に対する礼者に対して、門主自身が対面をとげていたのに對し増上寺方丈から、門主による礼者への直接の対面は必要なしとの申出があり、「即、為御名代、院家出座セリ焉」として覺了院が、名代として出座した。門主代行役の開始である。翌日の増上寺寺中よりの御礼に對しても「寺中御礼如例、最モ院家出座、口祝・末広等如例」として院家の出座で対面して、門主は出座していない。

寛文九年（一六六九）二月朔日、門主病中の為、一月中に將軍に對し年頭の祝詞をとげられない為、覺了院を以て進物を献じた。「大樹公へ未年頭之御祝詞不仰達、余リ為御延引間、以覺了院為御名代、御進物可被献哉与以吉良、被得御内意、今日被進」とされ、名代役を果たす事になる。門主は二十二日になり登城対顔をはたす。その折、院家・坊官・伊織も御礼をとげる。

同年四月八日、門主病氣治愈の為、熱海へ湯治に発興するが、覺了院は同道せず江戸学寮の留守を預かる。「江戸御発興、同十一日豆芟熱海へ御着、医王寺御宿坊也、少進供奉、覺了院・民部御留主乎」とあり、坊官岩波少進は供奉し、同じく坊官の民部は覺了院と共に学寮に留まる。民部とは蘭民部卿のことである。坊官の項に詳説する。

同年八月四日、増上寺二十六世森譽歴天が入院するが、門主への御祝儀の他に「院家・坊官・家老、各へ有祝儀乎」と、それぞれへも祝儀を持参される。

同年八月十日、増上寺二十五世頓譽智徹の遷化に付、門主は早速焼香に出向く。智徹は受法の師であり、馴身の故であるとする。十二日中陰中に名代として院家が贈経並びに香奠を遣られる。「（智徹）隱居中陰、為御名代、院家贈経并為御香奠、銀三枚被遣之、依為御師範、如此、不可為後例」とある。但し後例たるべからずとあり、増上寺門主の遷化に對する対応は、この度は極めて異例であり、師範であるからとの理由で、焼香・贈経等を行ったとされる。以後の勘例としない様にとあるのは注目される。

寛文十年八月二十六日に門主関東修学を終えて帰洛するに先立ち、八月十五日登城するが、その前日御暇上使として、酒井雅楽頭忠清・吉良上野守義央が、その口上の為に学寮に来る。その折、院家・坊官・家老へも「御前退出以後、表ニ而院家へ銀廿枚・時服五、坊官・家老へ銀十枚宛、被下之」として、それぞれへ下さる。『実紀』にもこの項についての記事で、始めて「院家覚了院」の名が記される。但し家老については、『実紀』では家老という名称ではなく「家司」と書かれる。

八月十五日の門主登城の折には、増上寺方丈と共に「御登城、増上寺供奉、准先例、院家・坊官・家老、何モ御礼申上矣」として、院家・坊官・家老が供奉して黒書院にて御礼を遂げる。寛文十年九月七日、門主上洛し十八日には参内をとげる。「御参内・諸院参、院家参内初而、御礼被申上、御土産有別記焉」とある。院家初めてと記すが、先に記した様に、位階勅許の折に参内をとげているので、門主に供奉しての参内は、今回が初めてであると理解しておきたい。

延宝元年（一六七三）一月十四日条に、坊官岩波少進年始の使者として江戸へ下る記事がある。ここに年始にあたって各所に出す書状の形式が書かれる。院家の分担としては、増上寺に対してのみ記し、「増上寺へ御書、或ハ從院家仰状」とされ、門主名乗の書か、あるいは院家の仰状にて、増上寺への年頭書状をとげるのだとしている。

翌延宝二年二月二十七日条に、門跡領村高覚を所司代へ持参するが、坊官と共に覚了院も同道する。その折、覚了院を以て仰入れを所司代にする。知恩院宮門跡は元和条目の第一条に示すように、脇住持ではなく、住持である門主と位置づけられており、それに相応するべき処置を講じて欲しいという内容である。この問題については『門記』では寛文九年（一六六九）よりその淵源・来由をたどることが出来、以下延宝二年（一六七四）十二月に至るまでの終始をかなり詳細に記す。延宝元年の覚了院の所司代に対する申入れも、老中や高家吉良上野介義央などの指図によったものである。門主尊光を知恩院三十七代玄普知鑑の後住にする意図に基いた動きなのである。この項では院家につ

いての『門記』の記事について述べているので、この件については後刻に期したいと思う。これ以後の覚了院の働きについても、この件が重要であるが、簡単に触れるにとどめる。坊官以下の項でも煩雑になるのを避けてその役割のみを上げるにとどめることとする。

延宝二年七月十一日付で「院家覚了院、大僧都勅許也」とあり、覚了院は法眼位を任じられて六年を経て、大僧都位を得ている。法眼勅許の折にくらべて一行のみの記事で、御礼の件などについても何も記していない。又法印位についたのかどうか『門記』中には記してなく不明のままである。『卿記』を検索してみると、法眼・法印・大僧都・権僧正などと次第する経緯がみられる。しかるに、『卿記』中の他の事例で見ると、若王子の例で示した様に、晃海は法印から権僧正に任じられたが、同日付の妙法院宮院家日嚴院の堯憲は、大僧都から権僧正への転任であり、越階は、それぞれの人物に対応されている様である。『門記』には覚了院に関しての法印勅許の記事がないことから、法眼より大僧都に転任したと考えておきたい。

翌日の延宝二年七月十二日には、寺家役者常称院九達・光照院靈欽・忠岸院存慶を呼び寄せ、門主の一件に付、説明している。「寺役者被召寄、以院家・民部、被仰下者（以下略）」とあり、以下に説明がなされる。門主の件は「此度者、御延引也」とされる。

七月二十五日、知恩院三十八代玄誓万無の入院式が行なわれ、二十七日に万無より門主へ祝儀を持参される。「院家・坊官・家老へ祝儀持参也、御対面・御吸物・御盃被下也」とあり、院家以下の三者へも祝儀が出ている。

十一月朔日「自方丈院家迄、以廓秀、右之通被申上」、十一月四日「自院家廓秀迄、以順応、右之趣、雖窺御内意、別儀無之間、其段可被相心得由、被申入也」、十一月六日「亦自方丈、廓秀并右之衆中参、院家迄、上件之儀申入乎」とある。門主の件に関連して、源光院然靈所遇の問題が惹起するが、その折の方丈と門主との往復について記している部分である。院家は門主の前役をはたし、方丈の使者に対して、そのことにつき門主の意向をうかがい、それを又

門主より使者をたてて、方丈の側の役者につたえる。その様な往復の中で門主は殆んど表面に出ることなく、院家が完全な代行役を果しているのである。

十一月二十七日、万無が七月に入院して四ヶ月後のこの日、源光院一件も落着を遂げ、門主がようやく方丈をたづね、方丈を饗応される。「方丈へ初而御膳被上、院家・坊官・家老・小姓供奉矣、六役勝手へ相詰平、入夜ニ、囃シ・仕舞有之、其外種々饗応、異于常也、午刻御成、杉原二束・紗綾一巻被遣之、丑刻還御也」とある。その饗応は常に異なり、午の刻より丑の刻に至るとあるが、正午の御成より真夜中二時の還御までの饗応であったと言う。

以上で『門記』中の院家に関する記事の引用を終る。知恩院宮門跡での院家の始まり、及びその名代役の一端が説明出来たと思ふ。

三

知恩院蔵にかかる『堂上用』^⑤の表題のある享保七年以後の宮門跡御殿及び堂上方の動向を抜書きし書継いだ記録がある。享保十七年（一七三二）十二月二十六日の条を引用してみると「宮様御内、岩波右近・松室齋宮、得度被仰付、岩波少進・松室侍従と改名之旨、届無之候得共、御聞及ニ付、金貳百足ツゝ御使僧を以遣之」とある。さらに享保十八年（一七三三）十一月二十八日の条では「樫田安房守、坊官ニ被仰付、得度、民部卿と改名、為御祝儀、金貳百足被遣之」とある。実は『門記』に坊官の語や坊官にあたる人物の動向・来歴を見出すことは出来るが、以上に引用した如く、坊官の得度の問題については不明であったのである。『門記』の記事中に、坊官の得度の記載は一度として見出せなかったし、得度を伴った改名の記載もない。ここに引用した記事には、家老や侍と名付けられる俗形の姿の者が、得度を経て僧形へと転進する様が表示される。すなわち、坊官は僧形にて門主や院家に随侍する者と考えられる。その役割については『門記』の記事に因ってこれ以後の考察で明らかにする所である。

まず『門記』中に少しの記載しかない良純の折の坊官について触れておく。寛永二十年（一六四三）十一月十一日良純は甲州天目山へ配流される。その折の記事に「于時、親王四拾歳、坊官三吉式部・土山宮内、何モ早世セリ乎、其子三吉宇兵衛・土山主殿共、甲州へ供奉ス乎」とある。良純の門主として過ぐす寛永二十年までの間の坊官名がわかるのは、知恩院史に関しては、この記事が始めてである。その時の坊官は、三吉式部・土山宮内の二名である。但し配流の頃には亡くなっており、配流にあたり供奉したのは、兩名の子供であり、三吉宇兵衛・土山主殿の二名である。この両者は配流中連続して随侍しており、万治二年（一六五九）六月二十七日良純が帰洛した折に、暇を受けて他へ転任した。「宇兵衛・主殿、何モ御帰洛迄相勤、後ニ何レモ御暇申シ」とある。

三吉宇兵衛の転進先については「宇兵衛者、天樹院ノ御方ニ有姉、御万ノ方与而無双ノ出頭、天樹院ノ御方薨去ノ後、御台ノ御方被召出、三吉ト云、此等之縁故歟、水戸殿へ令勤仕由乎」とあり、姉の縁故を得て、水戸殿徳川頼房の家中へ勤仕した。土山主殿は「主殿者、肥後ノ大守へ勤仕セリ乎」とされ、肥後熊本の細川家中へ勤仕したとされる。

又配流以後、門跡領は京都代官五味備前守豊直の預りになったと言う。「此時御門領離而京都御代官五味備前守預之乎、其ノ後本山御部屋荒廃セリ乎、雖然、増上寺御学寮者、無別儀而、其後明暦三丁酉年正月十九日江戸大失火之時回祿セリ乎」とある。良純の折の坊官は、第二代尊光に相続されなかったし、又門跡領も代官預りとなり、御殿が荒廢した事から考えて、良純配流以後、慶安四年（一六五一）尊光の入室が決定するまでの期間は御殿についての動きは無かったと考えて良い。良純の坊官と尊光の坊官とは年代的に多少重複する時期があるが、良純付の坊官は配流以後、坊官を名乗っていたのかどうかは確認出来ない。以後は尊光代に関する坊官の動きを調べることにする。

記事として最初に名称としての坊官の名が見えるのは慶安四年（一六五一）の条である。尊光が徳川家光の猶子になり、知恩院門主を相続することが決定した折に「自是、公儀之御賄也、坊官ノ手形ニ院ノ執權被加裏判、公儀之代

官五味備前守へ被遣之」とある。ここに門跡領が復活したのである。

人物の名前が書き示される記事は、三年後の承応三年（一六五四）の尊光の親王宣下の記事中であり、又御殿の復興は翌明暦元年の秋である。

承応三年四月六日の条に「此時之坊官、今井了休・佐治三省」とあり、各人に経歴の但し書きが示される。最初に今井了休は「是者、始外様ニ被召遣侍、俗名重左衛門ト云々、然処ニ折節坊官ニ可被召出者無之、其上右之者有働器量者故、従所司代被申上、則坊官被成之也」とある。所司代よりの申請により俗侍である重左衛門が今井了休と改名し、坊官に転任したのである。佐治三省は「是者、浅野因幡守ノ浪人也、則昌三門弟故、御読書為被遊、従昌三所司代へ申入、依之被召出也、雖然、了休心底ニ従所司代横目被申付哉与存故ニ、万端相役ノ様ニ令相談也」とある。昌三というのは、洛陽昌三と言ひ、所司代より申付けられて尊光の爲の読書指南をしていた儒者で、尊光のもとに毎日伺候していた。佐治も昌三の門弟であつたので、その縁由により昌三より所司代へ申入れをして坊官となるのである。今井は坊官は自分一人のつもりであつたが、指南役の佐治が坊官となつたので、所司代からの横目とうけとり、何事によらず、同役の様にはりあつた。

この兩人の体制で尊光代の門跡領坊官の系譜が始まる。兩者共に仏教との關係がうすい様子が、この但し書きからうかがわれる。佐治が儒者の門弟であつたという事は興味をひく事実である。

明暦元年（一六五五）秋、御殿の作事が完成するが、尊光の入室にあたって、得度の戒師の件で兩坊官は追放となる。すなわち「知恩院御座所御作事、就令出来、御入室得度可被遊由、従公儀雖有御内証、就御戒師之儀、御延引也。但此時、兩坊官御戒師之儀付、依異儀申、八月六日御追放也」とある。どの様な異儀をとなえたか不明であるが、作事完成と共に入室の予定が翌年五月に変更となつたのである。つづいて「佐治三省者、十余日過而被召歸也」とある。佐治はもどれたが、今井の帰参は許されなかつた。

この件をうけて明暦元年九月一日には、岩波少進が坊官に召出される。「照高院殿ノ坊官、岩波少進ヲ坊官ニ被召出也、但是者、今井了休帰参之儀、堅就不成、従所司代伝奏并院ノ執権へ被遂内談、院ノ被達叡聞、如此也」とある。今井の代りに院の叡聞により照高院宮の坊官であった岩波少進が、知恩院坊官として転進してくるのである。「門記」の筆者である元禄十一年（一六九八）七十歳の岩波延庸の知恩院宮坊官としての働きの開始である。年齢を逆算すると、明暦元年（一六五五）当時二十七歳の若きである。佐治三省は明暦三年五月二十五日四十一歳で没するので、この時三十九歳である。

さらに翌年の明暦二年二月八日の条に「院ノ非藏人、武田玄了、従仙洞坊官被為参也」とあり、武田玄了も坊官として迎えられる。尊光入室得度の折には、佐治・岩波・武田の三名の坊官体制が敷かれている事になる。

明暦二年五月八日、尊光入室の際の行列図の中には、武田の名はなく、坊官として佐治・岩波の二名が御輿のすぐうしろに随侍している。又受戒着座図では「御門跡御内衆」と書かれている。坊官と呼び、又門跡御内衆と坊官を呼ぶこともあったのである。翌六月武田玄了が將軍家綱に入室御礼の為に下向す。「大樹公へ御入室之御礼、御使武田玄了被遣」とある。八月には佐治三省が下向す。「大樹公御脇詰之為御祝儀、従諸家在御届、依之佐治三省被遣」とある。

明暦三年一月二十五日御忌の折に門主焼香に出向くが、この折の行列図には三人程「坊官」とのみ書かれて、三名体制であることがわかる。又この記事中に「則供奉ノ装束、他借之也」とあり、坊官の装束が未だとのつていなかった事がわかる。

同年五月二十五日「佐治三省、齢歳四十有一ニテ卒ス、無世嗣而跡絶早矣」とあり、佐治は四十一歳で亡くなった。世嗣がなくて名跡が絶えたことである。ここで問題となるのが、坊官は僧形だと先に規定したが、妻帯が許されていたのだろうか。その件は後に述べたいと思うが、「世嗣無く」とあることから世襲制があったことは事実であろう。良純

の折の三吉・土山も子供が坊官をうけついでいる。

これ以後、蘭民部卿の名が見える寛文二年（一六六二）までの五年間、武田・岩波の二名の体制がつづく。

ここで佐治三省・武田玄了に対する所司代よりの『覚』を紹介したい。これは『便覧書記』中にある写で、尊光入院以前の明暦二年（一六五六）閏四月二十一日付の『覚』とされ、御殿の内実を示す好史料である。『便覧書記』は、宝暦五年（一七五五）より天保三年（一八三二）までの各種の収集された覚書きの書継ぎの形式がとられている。知恩院役者が、書き写したと考えられる。

覚（各条に便宜上番号を付す）

- 1、知恩院御門跡御得度以後、御側之衆無沙汰無之様ニ相嗜、可被申事、
- 2、御門跡江常ニ御寺内役者器量之老僧一人宛、替々ニ毎日被相詰、御学文之御指南、可被申上候様、可申渡事、
- 3、他所之儀者不及申、雖為御寺内、御見物等之儀御遠慮可然候事、
- 4、十七日・二十日・二十四日、毎月方丈江可被成候様ニ可申上事、
- 5、面々私之意趣を以、御為惡敷儀、被仕間敷事、
- 6、玄了・三省兩人、御賄方・其外諸事精入可被申付事、
- 7、末寺・御寺内・宗門之公事等、役者之衆・兩人催為内談共、最良偏頗被仕間敷事、
- 8、浪人并芸者・町人等ニ至迄、濫ニ出入仕分、セ間敷事、
- 9、御受戒被遊候以後、御里より女人、御寺内江出入、堅停止ニ可致之事、
- 10、御門跡・諸事・御作法善惡ニ付、内通申仁於有之者、此方江可被申聞候、於被隱置者、兩人可為曲事、
- 11、御寺内火之元、其外御用心并掃除已下、無油断可被申付事、

（明暦二年）

閏四月廿一日

武田玄了老

牧野佐渡守^(親政)

佐治三省老

牧野佐渡守親成が京都所司代である期間は承応三年（一六五四）より寛文八年（一六六八）までであり、その間の四月があるのが明暦二年である。第一条の得度以後の文句にも合致して、坊官名も妥当であるので、随分後年の写ではあるが、ここに取り上げた。

武田・佐治の二人の名があり、岩波の名がない事情を考えてみたい。佐治・岩波の年齢は既に述べたが、武田の年齢が不明である。上下関係では、先に御殿に転進して来た岩波の方が上席の様に思われるが、実は武田の方が上席であった。『卿記』によると、明暦二年八月三日付で「玄了・喜安等叙法橋」として武田は法橋位を叙せられ、翌三年十二月五日付で「知恩院門主坊官延庸叙法橋」として岩波が法橋位を叙せられている。年齢や、これまでの院の非蔵人としての働きや、照高院宮での働きなどを勘案してのことであろうが、武田が上席で、岩波が次席であることがわかる。武田は岩波より年齢でも上であり、佐治と同列に扱われていたのであろう。上席の佐治・武田の二名の坊官に対して、所司代より出された『覚』と考えて良い。

第一条に、坊官は尊光得度以後、しっかりとお側につかえる様にとある。

第二条に、尊光への学問の指南役の設定をおこなっている。『門記』には、明暦二年六月八日付で「方丈伺候、御経被遊初乎、自是六役、依所司代被申渡、毎日一人宛伺候而、御経指南被申上也」と出ており符合する。

第三条に、尊光の行動に対する限定が見られる。寺内の見物でも遠慮せよとあり、むやみに歩きまわることを禁じている。門主は必ず沙汰ののち御殿から出る様に、という幕府の意向が読みとれる。

第四条に、方丈との対面についての規定で、月に三度の御成を許可している。定例行事の規定であるが、この日付での御成を『門記』中に確認出来なかった。定例であるが故に省かれたのであろう。

第五条に、坊官それぞれが、自分の意趣で事を計ってはならないとされる。

第六条に、武田・佐治の兩人が、賄方はじめ諸事にわたり、精を入れられる様にとある。門跡御殿の事務官としての責任的な色彩がみられる。坊官が御殿の経済について責任をもって処置していたことがわかる。

第七条に、知恩院末寺・門中寺院や知恩院塔頭とのつながりについて規定している。蟲眞なき様にとされる。

第八条に、御殿への出入の人々についての規定がある。浪人・芸者・町人などに至るまで、猥りに出入りしてはならないとある。御殿への出入の人の中に、浪人や芸者の名があげられるのは注目される。その様な事実があったのであり、あえて名を上げて出入の禁止をしたものである。

第九条に、尊光の受戒得度以後、女人の出入を禁じている。「御里より女人」とあり、禁裏・院中とのつながりのある門室であるので、御局や御局周辺のものが来ることがあったのであろう。女人の出入禁止は一般に寺院に対して言われることであるが、「御里より」という語が付加されている意味を考えておく必要がある。

第十条に、門跡の御作法のよしあしについて、何呉とも申すものに対して禁じている。又坊官の隠し立ても、坊官の曲事としている。

第十一条に、火の用心・掃除についての規定がある。

以上で特に目を引くのは、門主の御殿でのあり様は、かなり限定されているということと、その出入の人の内容のことである。やはり「浪人」「芸者」や「お里よりの女人」はその当時の寺院規定に照らしても、この様に名差しで限定されたことはなく、一般に「町人」「女人」の出入について規定するくらいである。その様な人々の出入が現実にあった為に、あえてこの様な文言になったものと思われる。御殿のありさまの一端を見るおもしろい。

明暦三年九月、岩波が年頭の御礼に向く。一月の江戸大火により、この頃になったのである。引き続き、十月二十五日、所司代より呼出しがあり武田・岩波共に向く。翌万治元年一月二十四日に増上寺にて執行される二代將軍

台徳院徳川秀忠の二十七回忌法事に下向についての沙汰である。

明暦三年十二月六日出発するが、門主同道での下向は今回が始めてであるので、人馬朱印留や、道中の模様、江戸に到着してのちの動向についても、先例たるべく細かに書き留めている。その人馬朱印状留に、

人足六拾人・馬貳拾五疋、從京都江戸迄可出之、是者知恩院御門跡、江戸御下向之時、武田玄了・岩波少進江相渡之者也、

明暦三年十二月六日

伝馬宿中

とあり、武田・岩波の兩名で道中を責任をもって預かる様にとされる。この様な朱印は道中の規模を示すので以後もその員数を示しておく。但し坊官一人の下向についての員数については『門記』には記載がない。門主同道の時のみ発行されるものの様である。今回は人足六十名・馬二十五疋の行列であった。

翌万治元年（一六五八）一月十九日より始まる増上寺での万部執行の折の坊官の役割は「坊官者、御後ニ候ス、侍法師・布衣者、楽人ノ後ニ居ス、御経箱・御草座持者、侍法師或ハ布衣也、坊官請取之、敷之」とある。又「御贈経御備へ、先外陣へ御廻、布衣・御経唐戸迄持参之、爰而坊官請取之、御先へ持参之、中陣而役者へ渡之」とある。贈経するにあたって門主の側にあつて御経を中継する役割である。

一月二十四日、法事終つて早速尊光へ上使を遣わされ、御布施を出されるが、その折「為御布施、銀五千両被進之、上徳寺ニ銀十枚・時服一重、玄了・少進ニ銀十枚宛被下之也」とあり、上徳寺と共に銀十枚を武田・岩波の兩名がうけている。上徳寺は六役の内の一人で、尊光の御経指南役であつたので、この度同道したものである。

一行は二月十一日江戸を出発し、二月二十六日京に到着するが、岩波は今回の尊光下向についての御礼の為、四月一日再び下向する。

万治元年夏の条に、門跡領の件に付「從所司代、京ノ御代官五味備前守へ被申渡者、知恩院御門跡御領地、先規之通、兩坊官へ可被相渡云々、依之、家来兩人被出、最兩坊官出、此節桂ノ次良兵衛ト云仁、知行方功者故、雇誘引スル也、最モ水帳被渡也」とあり、つづいて「此時節迄者、七月・極月兩度宛、御賄ノ勘定帳、所司代へ坊官持参ス、加所司代ノ裏判、自五味備前守、御賄料請取之、然トモ右之首尾故、当七月ヨリ御手前ノ御賄也」とある。慶安四年（一六五一）以来今年に至る迄、その折々の勘定のもとに五味備前守より賄料が支出されていた。以後は坊官の責任において門跡領千石を支配することがここに確定したのである。坊官に対する所司代の掌握度も増し、又御殿の内部機構が整つて来た事をも示す事象と言えよう。

万治二年一月十日頃、尊光参内にあたり、その前日に「前日禁裏・本院・女院・女御・院女御へ以坊官、御祝儀被献」として、坊官が祝儀をとどけた。四月には「江戸へ年始之御使、少進御下シ、御進物如例」とあり、岩波が年頭礼の為に下向する。翌万治三年四月は「為年頭之御使、江戸へ玄了御下シ、御進物等如例」として、今度は武田が年頭礼の為に下向した。

同年八月、老中松平伊豆守信綱が大阪へ来る。「此節、開山忌、兩様御願之儀、以玄了被仰遣之處、今度者不混余儀、大阪御城迄之御用ニ令上洛故、兎角之御受、難申上間、兎角江戸へ可被仰遣返事也」とある。信綱の上洛は、七月六日の大風雨により二条城はじめ所々の破損や淀川の洪水の報が入り、それをうけて大阪城見聞の為になされた。七月十六日より八月晦日までの期間の上洛である。坊官武田は、来年寛文元年（一六六一）正月の元祖法然上人の四百五十回忌の折に「兩様の御願」とあるが、贈官と勅会についての御願をしたのである。武田は四月の下向の折にも高家吉良若狭守及び寺社奉行に対して、この様に願ひ出ている。但し願は成就せず、この度はその儀なしとされている。

九月武田は再度下向する。八月の信綱の言葉をうけてのことであるが、この折堀田上野介正信の一件で老中紛糾し

ていたので、結局すぐに京に戻っている。十一月に再び下向するが、今度は坊官ではなく梅嶋頼母という家老が下向している。結局「時代末熟故歟、不相調乎」とあり、沙汰止みとなり願を果たすことは出来ずに次の五百回忌の折の勅会・贈官を待つことになる。事にあたった坊官の行動力のある有様が示されている。

翌寛文元年には、正月に禁裏の大火があり、又江戸も大火があつた為か、年頭使は九月に岩波が下向した。

寛文二年（一六六二）三月二十五日、尊光は修学の為関東に下向する。その折の人馬朱印状に「武田玄了・岩波少進」の名が見える。朱印状の形式は先に示した通りであり、道中行列の規模は、人足六十九人・馬三十一疋である。四月八日学寮到着後、十四日まで公儀より派遣された「御馳走人・御賄人」によって賄われたが、十四日以後は「自今日、御自分之御賄也」とされる。

その賄料に関する内容と請取の方法が『門記』に示されるが、門跡方からの請取状の手形は坊官二名がおこない、宛先は増上寺の「所化役者兩人・寺家役者兩人」となっている。「則御逗留中ノ御賄、一箇月ニ銀一貫五百目、御扶持方一箇年ニ三百俵^{但三斗五升入}、増上寺ノ役者ノ手形ニ寺社奉行ノ裏判而、從代官請取之、米・銀手形二枚也、又役者へ者、從坊官請取手形遣之、則写之帳有之、七月八日・極月八日兩度ニ渡也、銀者從御納戸方、役者請取之、此方へ被渡之、米者江戸近郷之庄屋・百姓、御学寮へ持参シ奉納之、皆済手形從役者、庄屋・肝煎へ遣之也、自是毎年如斯矣」とある。坊官より役者へ、その折々に渡す請取手形については「坊官中在京之時へ、一判ニテモ請取之也」としている。坊官二名の内、一名が京に戻っている時は一名の手形で良いとされる。すなわち一名は門主付きとして必ず学寮に残っている事を示している。その請取方法の内、銀については、まず納所方より増上寺役者が請取り、それを坊官に渡す方法をとる。又米については、江戸近郷の庄屋・百姓が直接学寮へ持参するという方法をとっている。この件に付、『門記』に傍註がある。本文と同筆であるが追筆したものである。坊官三名より吉良若狹守義冬に宛てた『覚』であり、坊官名に初めて蘭民部卿の名が見える。坊官三名の体制がここに再び始まるのである。

覽 (各条に便宜上番号を付す)

1、御門跡江自來月相渡申候御下行之米・銀子、増上寺役者請取、此方江渡申候様仕度旨、片桐石見守殿江茂申入候様子者、御門跡被召使候者共、兩人始、御城之勝手不存、其上皆々共、折々者御知行方之儀付、可罷登候間、猶以不調法成者共、罷越候而モ如何存申上候事、

2、八木之儀者、縦此方付被進候共、増上寺役者請取、此方江被渡候様仕度存候事、

3、寺社御奉行江茂右之旨、申上度存候共、乍慮外右之通被成御物語、公儀向可然様奉頼候事、以上、

(寛文二年)

四月十七日

蘭部卿

岩波少進

(吉良義冬)
若狹守様

武田玄了

とある。これによると、第一に御城の勝手向について何も知らず、又門跡領知行のこともあり上洛の為に御殿を留守にすることで不調法なものが罷越してもどうかと思うこと、第二に米の件についても、増上寺役者請取りの後、学寮に渡してもらいたい事、第三に寺社奉行へこれらを申上げたいが、義冬よりこの件について取り次いで欲しいこと、と言っている。勿論、四月十四日の沙汰は絶対であり、請取の方法について変更はなかったものと思われる。増上寺内の学寮にあつての修学であるので一応は増上寺の支配のもとにありながら、尚学寮として独自の賄を有し、格別に機能している様子が窺われる。

同年五月には武田が上洛する。五月朔日に京を襲った地震に付、禁裏への御機嫌伺の為である。この折知恩院内の御殿も破損した。

年末には、岩波が禁裏等への歳暮祝儀の為に上洛する。尊光の修学の為、御殿の留守が数年続くことになるが、その為の知行方についての取り決めが必要である。岩波の上洛に際し知行の件を記している。「御知行方者、御家来ノ

代官八木治右衛門納所之、但毎暮坊官一人宛、上京ス故ニ、御留主中之請弘等、御留主居并代官、相對シ執行之矣、自是毎年如斯」とある。毎年暮には必ず坊官一人は上洛するとされる。留守中のことは代官と留守居の一心院故西にまかし、これを勘例とするところある。但しこの上洛は岩波一人ではなかった様である。翌寛文三年一月二十七日の条に、靈元天皇が踐祚するが「此時、民部在京而御祝儀献上之矣」とあり、蘭民部卿が在京していることが窺える。蘭は前年四月十七日付の『覚』にその名が『門記』に初めて登場するが、この年末から年始にかけて岩波と共に在京して、岩波より祝儀の仕方などを教示されたものと思われる。一月二十七日の条に岩波の名は無いので、岩波は先に下向した様である。

寛文三年五月三日、尊光は日光に参拝するが、その折の人馬朱印の員数は人足二十人・馬十疋である。「玄了御供、少進御留主、民部者在京也」とあり、武田は日光に供奉し、岩波は学寮の留守をまもり、蘭は未だ在京していたのである。

同年八月五日、臨時の合力米を幕府より下行されるが、これは在府中の「御勝手不自由可有御座」という理由で出されたものである。それに付、御藏衆に対する請取の手形は岩波一人の名で出される。

又十二月晦日に幕府は尊光供奉の諸色に付、金三百両を下行するが、その請取も岩波が行っている。翌年の台徳院三十三回忌法事に尊光が導師をつとめるが、供奉のものはその服装が整わず、今回は輪王寺より借用という措置をとった。その為に「追而御用意可被成」として下行されたものである。岩波は坊官として全面的に勘定方としての役割を果していることがわかる。

年末の歳暮の為の祝儀は「玄了在京ニテ調之」とあり武田がつとめた。

寛文四年一月二十四日尊光は増上寺での台徳院法事導師をつとめる。その折の行列図には、三名同列で坊官名がみえる。左より次第に書くと「坊官岩波少進法橋・坊官武田良泉法眼・坊官蘭民部卿法橋」となる。又法事中の記事に

「坊官武田良泉・岩波延庸・藺広豊」と記される。『門記』中に坊官について氏名を記すのは、この一箇所だけである。

武田・岩波は『妙法院史料集』を先に引用した折に、寛文五年の時点で「武田玄了法眼永乾・岩波少進延庸」とあったが、武田の名が良泉から永乾に変更になっていることが分る。武田は位階が法橋より法眼に変更しているが、これは『卿記』によると、寛文二年八月十日の事である。即ち「知恩院宮坊官法橋玄了叙法眼」とある。

次に藺民部卿は藺広豊と氏名が記されるが、これについては、他に何も断定するものがない。『卿記』の万治三年（一六六〇）十二月十四日の条に「知恩院宮坊官立白、琳益等叙法橋」とある。知恩院宮坊官は、万治三年には武田・岩波の二人しか確認出来ないし、共に法橋位を得ていることは、二人の序列に関する件で前述した通りである。『尊統親王御得度之記』によると、宝永四年（一七〇七）六月十三日条に「坊官藺宮内卿法眼広白」と見える。この宮内卿については『史料集』の元禄十三年（一七〇〇）六月二十八日条に「藺宮内卿、昨日改名被仰付候ニ付、御使僧」とあり、それに先行する元禄十二年一月三日条に「藺民部」と出ているので、民部卿が宮内卿に改名したことがわかる。とすると藺広白という名の坊官が宝永四年には確かに存在し、しかもそれはもと民部卿を名乗っていた。年次的な差異をみても五十年を経ても、同一人物の可能性は高い。「立白」と言い、「広豊」と言い、「広白」と言い非常に似通っている。玄了の例からみても改名の可能性は高く、この三者は同一人物であるとしておく。

岩波延庸のみ問題なく確認できる。しかし『門記』『妙法院史料集』がなければ、岩波少進なる人物の名前の特定は実は困難なのであった。

同四年三月禁裏・院中へ年頭礼の為、岩波が上京する。

同八月十四日「自吉良若州、明十五日巳ノ刻岩波少進召連登城可申由、老中被申由、被申越也」として、岩波は吉良義冬同道にて十五日登城する。十五日条に「少進、則吉良へ被遣へ、一処ニ登城ス、老中浪ノ間ニ列座、少進被呼

出、雅楽頭上意之趣、被申渡者、知恩院御門跡、京都之御屋敷、去ル地震之時節及破損、依達上聞、修理料被進之也」とあり、岩波が老中酒井忠清より申渡されたのは京都御殿の修理の件である。十月この件に付、大阪藏奉行での修理料の銀子請取手形は、武田が上京して行方。武田はそのまま京都にて御殿修理に立ち会う。「玄了在京而知恩院御学殿御修營始也」とある。又十二月と翌寛文五年一月も武田は在京して、年末・年始の礼をつとめる。

寛文五年六月二十五日、「聖護院殿御内、從岩坊・雜務、玄了・少進方へ同月十八日之飛札到来矣」とあり、尊光二品宣下に至る一件の往復がここに始まる。対坊官に関しては武田・岩波兩名が名を連ねるが、高家吉良や両伝奏に對しては武田が主導で動いている。この件に関して蘭の名は見出せない。尊光二品宣下に至る経過は、かなり具体的であるが、紙幅の関係でここに述べることは出来ない。

寛文五年十一月八日、岩波名で寺社奉行加々爪甲斐守直澄宛に『知恩院宮御知行村付之覺』を出している。これは十一月三日付の知恩院宮門跡領知行高千石の朱印状に関するものである。又十一月二十二日、加々爪直澄より岩波へ書状が来る。日付が前後している様に見えるが、これは坊官が在府しており京都との連絡に手間どり、日付を前後することになった。『実紀』^④では十一月二十四日に朱印を渡すとあり、加々爪は門領の確認のち朱印を渡したことがわかる。

年末の歳暮並びに翌六年の年頭礼は、武田が在京してこれを行った。

寛文六年三月五日、尊光は修学を終えてこの日江戸を出発する。先立つ三月一日、尊光暇乞に登城し家綱と黒書院にて対面するが、その折坊官等供奉する。「次ニ岩波少進・園民部卿・梅嶋頼母、何モ御礼申上、但坊官黒書院ニテ御礼申上者、十四年以前、輪王寺御門跡ノ坊官、前ノ大樹公ノ御時御礼申上例有之、」とあり、岩波・蘭と家老梅嶋が尊光に供奉して黒書院まで行き礼を遂げたが、これは極めて稀な例であるとして、但し書きをつけている。武田の名は無いので在京のままである。尊光上洛の道中は岩波が引率した。その規模は人足七十人・馬三十疋である。一行は三月十七

日京に到着した。のちこの上洛をうけて四月には武田が上洛の御礼の為に下向する。

五月二十日、輪王寺門主守澄が上洛してくるが「草津迄、為御迎坊官被遣、御菓子被進也」とあり、迎役として坊官が出向くこともあったことがわかる。

同年十一月頃の記事に「坊官位階依申上、鷹司摂政公、兩伝奏飛鳥井垂相・正親町垂相、柳原弁へ雖被仰遣、未年故不調也」とある。坊官名は示されないが、位階の進叙を申請したのに対し、年限が不足しているとの理由で却下された。当時岩波は三十八歳の法橋である。

寛文七年二月、年頭使として藺が下向す。藺の使者としての下向はこれが最初である。

二月二十一日、尊光が大坂へ初めて下向す。この件に付「御下向之事、去ル五月亥了江戸へ被遣節、以吉良、老中迄有御届乎、依之所ノ町奉行彦坂壱岐守方へ、以少進御届被遣也」とある。大坂へ行くのでさえ、前年の武田下向の折に、吉良より老中へ依頼してようやく実現したのである。下向が決まると、早速岩波が所の町奉行へその旨について報告をするのである。

寛文七年三月二十七日、尊光は再び修学の為に関東に下向する。「但此時了了者依病氣、御留主仕也」とあり、武田は病氣であつたので京にて御殿の留守をまもることになった。道中の規模は人足七十二人・馬三十疋である。その朱印には「岩波少進江相渡之者也」とあり、道中の差図は岩波がした。

この折「此時御家来・供奉者、悉被仰付趣、以書付御発駕前ノ宵ニ於御台所、申渡之、但當時雇之者迄、如右」とあつて、道中規則なるものが作製され、家来・供奉のものを集めて言渡されたのである。二十一条に亘る条々から成り、道中における細かな規定であり、この文言はこれまで知られていないので、長文であるがここに取上げることにする。道中での各人の役割の一端が窺えるものである。

(各条に便宜上番号を付す)

1、道中而諸事可致堪忍、縱傍輩中、如何様之不足雖在之、道中而互ニ一言之儀堅可慎之、若不成堪忍儀於有之者、坊官中へ密談可有之事、

2、御輿之前後而諸事ノ雜談仕、或為私、茶屋等へ立寄、調物等不可致事、

3、御休泊并茶屋等而遊女之弄、勝負之沙汰、堅可慎之事、

4、道中而御存之方へ御対面之時、御供廻平伏可仕、但、乘懸之分者、御輿之時者、早下馬仕、面々乗掛之側ニ平伏可仕、尤人馬共ニ片脇へ一行ニ可寄、并御末寺へ途中而御対面之時、同前、但、御存之方御輿之前へ於見者、御供衆早案内可申上事、

5、往來之衆へ随分除可申、但自向、行当不儀之仕合雖有之、早自此、御免可申事、

6、御休泊、或ハ茶屋等而亭主并下人等慮外仕、又者膳部等、龜相之品雖在之、曾而雜言申間敷、付、下宿雖惡可堪忍事、

7、御定之外、人足一人モ不可取、若用事於在之者、坊官中へ可有内談事、

8、宿之出入、或ハ舟場而人馬・船等雖及遲滯、我先ニ与不可急、次第々ニ靜ニ可參、心高声之雜言申間敷事、

9、御休泊而御長持・小道具等、休番衆出入可仕事、

10、歩行之供奉衆廻ニ可為乗馬、但乗番之衆、依時差図次第ニ歩行之供奉可仕事、

11、御宿并茶屋等而諸事之扱、手形可取、其外無別儀趣、可為致加筆事、

12、頼母・伊織、替々一・二町程御先乗、御存ノ方并諸叟見合、早御左右可申上事、

13、人馬之役并御賄人・御料利人、相談次第ニ前後勝手、宜様ニ御用可達之、毎度付答可為專要、付、板間之者、替々一人宛御輿之供奉可仕、非番ノ者、御宿先達而可參、亦一人者、御料理人へ可仕事、

14、御荷廻シ男頭、上下ノ者可相添、御召替ノ御輿・御長持・駄馬等、御休泊へ先達而可參、問屋へ着置時、荷

数読渡可預之、道中乱行ニ參間敷、但宿出ル時、坊官中役人衆迄、可相屈之事、

15、御宿取衆、御本陣近ニ下宿可取之事、

16、小者、半分宛、御本陣へ可詰、最何其至々へ懇懃ニ急度奉公可勤事、

17、人馬之役人、第一神妙可為專要、但、御定之外之人馬等迄無相違趣、宿々而手形可取之事、

18、御道具之兩覆并挑灯・供合羽ノ出入、中間衆之内一人、当番之御草履取、為兩人取扱可仕事、

19、御乗懸、御台所行事ノ者可仕、御休泊而者、御台所方ノ御用可達之事、

20、於道中、公私之道具於有紛失者、中間而可密談、其上ニ難閑様子於有之者、役人方へ密ニ可屈之、此外、諸

亵広沙汰仕間敷事、

21、道中而、何茂ノ内、病人或怪我・傷損等之者、於有之者、為其中間、随分介抱可仕、若滯儀有之者、役人方

へ可断之事、

右条々准例被仰下間、堅可相守者也、

末（寛文七年）

三月廿五日

尊光代の道中行列は、これまでに二度の下向と日光参拝・大坂下向の四回が検索できるが、これまでの道中の所業を想起してこの条々が作製されたと考えて良いだろう。この様な道中行列についての条々は、知恩院方丈の上洛・下向等に関しても、これまで確認されていない所であり、道中における諸々の事情が窺える好史料である。坊官は行列の統括者であり、その名称は第一・四・十四条にしか出てこないが、道中の失態が表沙汰にならない様な配慮が見られる文言ばかりである。いかにも慎重に道中の行程を成し遂げた事がうかがえる。逆に言えば、この文言に見られる種々の事実がいつもその道中に付随して起ったことが予想され、その意味では大変な道中であつた事がわかるであらう。

う。

一行は四月十日に江戸へ着くが、高家吉良へ御届の使者は藺がした。翌十一日老中へは岩波が御届の使者をつとめる。この頃より藺民部卿の名がよく見られる様になり、責任の一端を担う程に成長した事がうかがえる。江戸到着以後の記事は、覚了院の折に述べた所と重複する所がある。

尊光下向して早々の五月十四日「玄了病死セリ矣」と出てくる。武田玄了は『良正院過去帳』中に「寛文七年五月十四日、皓月院法印玄了大和尚」と戒名を検索出来るが、非常に簡単な戒名である。武田の法印位については、『門記』では確認出来なかった。

これにより以後は、岩波・藺の二名の坊官体制になるのである。然るに、門主の名代としても働き得る院家覚了院が、この時既に存在し院家・坊官体制が、ここに始まり、着実に歩を進めることになる。

寛文七年年末の歳暮については、藺が在京してこれをつとめた。

坊官の項について、これまで長々とその軌跡をたどって来たが、紙幅の関係で以下の事項については、その動向を附表①を以て示すにとどめる。坊官は御殿の中であって、非常に重要な役割を果しており、これ以後も多数その名を検索する事が出来る。但しこれまで述べ来たった所で充分に知恩院における坊官の役割や立場の一端について示す事が出来たと考えている。これ以後の件に付、附表を以て示す一つの理由は、院家の項でも触れた様に寛文九年以降は、岩波が中心となって門主尊光の知恩院住職兼帯運動に関する動きが始まり、それについての記事は非常に詳細に亘り、とてもその動向を述べきれないからである。以上の様な坊官の役割・立場をふまえた上で、門主の住職兼帯運動についての顛末を述べることを、今後の課題としておきたい。

最後に岩波少進延庸について触れておきたい部分がある。それは妻帯の問題についてである。『地下家伝』^④には、知恩院宮の坊官・諸大夫・侍の家伝が載せられるが、その記す時代は大概元禄以後のものである。「岩波氏」の項に

は、最初に「延張源延庸孫」として「元禄十二年九月廿八日生」と出ている。知恩院外史料として『卿記』『妙法院史料集』以外に「延庸」の名が示されるのが、この『地下家伝』である。私自身、知恩院所蔵史料中に未だ「延張」なる名を確認し得ない所であるが、「延庸孫」と記載されている事をもってしても妻帯の事実が窺える。先の『門記』の概要について述べた折に、一人「岩波勤負」なる人物を引用しておいたが、この人物が延庸の息男ではないかと、私は考えている。但しその名を確認するには至っていない。延張の生まれた元禄十二年は、延庸七十一歳であり、世代交替について見れば、少し間がありすぎる様にも思うが、現時点で岩波について分るのは、以上が全てである。いづれにしても延庸は二十七歳で知恩院宮御殿に坊官として出仕しており、この世代交替の年齢格差から見ても、その妻帯は出仕以後の可能性が充分考えられる。坊官は得度してのち坊官と呼ばれると、この項の最初に規定したが、それに従うと、坊官となって以後は、御殿付きとして、御殿に居を与えられていたのであるか。或いは他所から勤務していたのであろうか。『妙法院史料集』^④には、門主堯恕が、聖護院門跡の入峯行列を見物する為に、坊官菅谷左京の館に行っている記事が見える。明らかに坊官が他所に居住していた事を示す記事である。但し知恩院所蔵史料中にはこのような事象は未発見である。岩波が坊官として御殿に勤めながら、別に一家を設けていた可能性が充分あり、未だその居宅から勤務する姿を史料中に如実に示すことは出来ない乍ら、その可能性を私自身はっきりと否定しきれないでいる。勿論『門記』にそれを想起させる様な記載はない。知恩院における坊官の妻帯とその居宅の件は一つの問題提起として、ここに言及しておくにとどめる。

以上をもって坊官の項を終る。

四

最後に家老・侍・僧衆・小姓について簡単に触れておきたい。

まず「家老」という名称であるが、『門記』では全て「家老」と記している。御殿の構成人員を掌握する為に引用した尊峯向関の折の道中人数覚には「諸大夫・御側用人」とされているが、この内の御側用人中の「梅嶋頼母」なる人物は、『門記』では一貫して家老と呼ばれる様である。この「家老」にあたる人物は『実紀』^④では全て「家司」とあらわされている。今は『門記』に従って「家老」という名称を使用することにする。

家老として『門記』で最初にその名を検索出来るのが梅嶋頼母である。万治三年（一六六〇）十一月に、元祖四百五十回忌にあたり贈官・勅会を幕府に申出た折「就右御願之儀、亦梅嶋頼母御下シ雖彼成、時代未熟故歟、不相調乎」とある。

もう一人検索出来るのが角田伊織である。寛文四年（一六六四）一月二十四日、台徳院三十三回忌法事の行列図中に、梅嶋と共に、その名が見える。

この二つの記事が『門記』に見える各人の最初の記事である。以後、梅嶋は九ヶ所、角田は五ヶ所に検索出来る。その序列は梅嶋の方が上席の様である。それは、寛文六年二月晦日の条に「少進・民部・頼母各銀十枚宛、拝領之矣」とあり、尊光が修学を終えて上洛する折、黒書院にて家綱に対面するが、供奉した坊官と共にその名を記されているからである。

梅嶋は寛文七年三月二十五日の二度目の修学の為の下向に付条々とある二十一ヶ条中に、角田と共に「頼母・伊織、替々一・二町程御先乗」とあり、道中の先乗の役を果たしている事がわかる。又同年四月十五日、覺了院の初登城の記事中に「少進・民部・頼母御礼」として出るし、翌寛文八年には、武田玄了が没して坊官二名体制となった所で、年末の歳暮・年頭礼の使者を在京して勤めているのである。

最初にその名が見える頃から家老であったのかどうか確定出来ないが、尊光時代が始まって御殿の組織が整っている中で、家老たる資格を得るに至った事は充分予想される。寛文九年以降『門記』に「家老」とのみ出てくる場合も、

大概は梅嶋を差していると考えて良い。

角田の方は、上記の他に寛文九年二月二十二日、尊光登城に付、院家・坊官と共に供奉している。「院家・坊官・伊織御礼」とある。この時、梅嶋は在京して京の御殿をまもっており、梅嶋の代理として家老の次席である角田が供奉したものである。

御殿における家老役は、坊官の下にあつて侍衆を統括するという役割を担っていたといえよう。

では侍衆ではどのような人物が検索出来るかと言うと永井五兵衛である。永井は明暦三年（一六五七）十二月六日、尊光台徳院二十七回忌に下向の折、御殿の留守をつとめる。次に寛文三年（一六六三）八月五日条に、関東学寮に対する臨時合力米の下行にあたり、下行米を請取りに浅草の蔵まで出向くのが永井である。更に寛文七年三月一日、尊光の二度目の修学下向にあたり、その下向が体調悪きにより延引する所であったが、「御不例次第輕キ御様躰故、先達而永井五兵衛被下也」とあり、延引せずにすむという知らせを、先触れとして永井を関東に下向させたのである。

以上から永井は、家老の支配の中に居る侍の中での上役と言える。或は代官と呼ばれている人物かとも考えられる。その他、侍の他に「下部」と呼ばれるもの達があった。寛文十年八月二十六日条に、尊光の帰洛にあたり「京都從御領、侍分六人・下部三人、御迎ニ被召下也」とあり、その道中の御供の為にわざわざ京都から九名が下向したのである。「御領より」とある所から、いつも御殿に居るのではなく、平常は門跡領内に配属されていて、尊光の行列などが形成される時に招請されるもの達かもしれない。勿論御殿にも侍・下部と称される人が居たことは充分想像できる。但し『門記』中にそのような記載はない。

次に僧衆のことを述べる。この僧衆と規定される人物は四名で、讀譽了山・觀応・順応・綜百である。尊峯向関の折の「召連人数之寛」に言う所の茶道にあたるのかもしれないが、断定する根拠を『門記』中に見出せなかった。

「僧衆」と呼ぶ根拠は寛文四年一月十六日条中に「坊官・家老・小姓・侍中・僧衆・下部」とあることに因る。もう

一点は了山が「讃誉了山」と誉号を付与されていることであり、これを踏まえて敢えて「僧衆」と呼ぶことにする。了山が登場するのは、寛文四年閏五月条で「本山へ為入院祝儀、了山被差登也」とある。知恩院三十七代玄誉知鑑の入院の祝儀の為の帰洛である。方丈の入院祝儀であるのに坊官・家老が出向かなかった理由は、尊光が六月十一日加行に入るからその用意に忙しかったのだと思われる。

同様に寛文六年秋の条に「此度御礼、増上寺迄、了山被下也」とある。尊光在京中に江戸の学寮の普請が成就した折の下向である。この理由も、十月三日梶井宮盛胤導師のもとに金剛寿院宮一周忌法事が執行されたり、輪王寺宮が上洛する記事が前後にあるので、尊光の在京はこの一年間であり、坊官達は御殿を離れずに了山を派遣した様である。翌寛文七年閏二月二十二日の覚了院得度中に「了山・観応」とある。知恩院寺内塔頭僧の西養院・光照院と共に名を連ねている。御殿側の人物として、この図中に名を記すのはこの兩名のみである。

同年五月二十一日、「從京都、飛脚到来、去十四日亥了卒スル由、註進之故、良山被登御香典等、下賜之、一七日・五七日方丈被召寄御追善被仰付也」とある。武田玄了卒去のしらせをうけて了山が上洛するのである。

寛文十年九月二十日、後光明院十七回忌について門中より使僧派遣のことを、尊光より方丈へ伝達するのが了山である。「依之、御門中之内、誰也被遣度由、以了山方丈へ御相談有之」とある。

了山は延宝元年一月九日没するが、その折の記事に「讃誉了山、去ル極月月中旬、黄疸相煩、寺家ノ光照院与常ニ入魂故、於彼所保養矣、雖然、終ニ無医驗而、齡五十有二ニ而遷化矣」とある。覚了院得度図中でも光照院の側に座しており、又ここに光照院と好身にてそこで保養したとある。寺家塔頭には沢山の得度をした僧がいた様であるが、御殿が機能するに従って、塔頭内の僧の内、御殿に移ったものがこれらの人物ではないかと、私は考えている。仕事の内容は使者としての役割しか『門記』では見出せなかった。又御殿側の人物で誉号が記されているのは、『門記』中にはこの了山だけである。誉号を持つことの意味についてはわからない。

延宝二年六月十九日、伝通院での本理院葬礼に付、門主よりの代僧が必要かどうかの間合せを岩波は観応にさせている。「此時、自当門御代僧可被進哉与、則江戸而少進、以観応御法事奉行迄雖申入、御門跡御在京之間、不苦儀与被申故、其事止也」とある。岩波はこの時在府中であり、観応が岩波と共に在府していた事がわかる。坊官の下向にこの様な僧衆が随侍している様である。

二日後の六月二十一日条には「本山ノ寺役者常称院・光照院・忠岸院へ以順応、被仰遣者」とある。順応は御殿にあつて使者としての役割を果たす。観応と順応とは別人であることがわかる。

以下六月二十五日、七月二十日、十月二十六日、十月二十八日、十一月四日、十二月二十八日と六ヶ所に順応の名がみえるが、いづれも御殿よりの使者としての働きをしている。

七月二十日には粽百と共に順応は、知恩院第三十八代玄普万無の上洛にあたり、山科阿弥陀寺まで御殿の使者として迎えに出ている。但し御殿の使者は、院家・坊官・家老などでなく僧衆である彼の兩名のみであつた。

ここで取上げた僧衆に関しては、その仕事は一貫して随侍や使者の働きのみであつた。

最後に小姓について述べる。万治三年六月十六日、小姓の山田斉之助が尊光の御経指南役の上徳寺を切りつける事件が記される。「御嘉祥、上徳寺伺候、則宿ス、但玄了者江戸ノ留主、少進者父之喪中故、為御無人故也、夜ニ入、御客殿ノ仏前ニ初夜之看経被行、亥ノ刻計ニ御念仏被廻向、退出之処ヲ、於使者之間、御小姓山田斉之助、切之、器量僧故、乍手負、其ノ脇指ヲ被奪故、脇差ヲ捨、御庭へ走出、東ノ高壁ヲ乗越へ、青蓮院殿ノ御家来鳥居小路藪ノ内ニ而縊死ス乎、手負ノ僧、内外療治雖有之、深手故、終ニ夜中ニ遷化也、則所司代届之処ニ、則見体荒川五左衛門亦翌朝御仏参之切、所司代玄了宅へ被立寄、有吟味、最モ齊書置懷中ス、併意趣不分明乎」とある。慶事の為に向いた上徳寺であるが、武田は下向中、岩波も亡父の喪中にて御殿無人の為に泊ることになった。おつとめを終わって客殿を退出した所、使者の間にて小姓の山田斉之助に切りつけられた。手負い乍ら山田の脇差を奪ったので、山田は青蓮

院宮に逃げ込み、坊官鳥居小路宅の藪の内で縊死した。上徳寺も夜中に結局遷化した。山田は書置を懐中にしていたが意趣は不明とある。この様な顛末であるが、尊光付の小姓がいたことが確認される。

他に二ヶ所「小姓」という名称が見られるが、いずれも名称のみで具体的ではない。すなわち寛文四年一月十六日、第三十七代知鑑が江戸学寮を継目の礼に訪ねた折の祝儀を宛てた者共の中に「坊官・家老・小姓・侍中・僧衆・下部等迄祝儀持参也」とある。小姓は家老の次、侍中より前に記されており、この序列が御殿における小姓の位置、或いは各者の位置を物語っていると言える。

延宝二年十一月二十七日条、第三十八代万無が、尊光始め御殿の者共と始めて対面する折に「方丈へ初而御膳被上、院家・坊官・家老・小姓供奉ス矣」とある。これには侍中以下の人々のことは記さない。いずれも小姓の存在を記すにとどまるもので、上記の山田以外に具体的な名前は確認されなかった。「医者」については述べ得なかった。その名を附表②に掲げるにとどめておく。

以上において『門記』中に登場する所の、御殿をめぐる尊光を除く殆んど全ての人物を検索し、その検討を終えたことになる。

最後に『門記』中における各人の記事の変遷を一覧表として掲げておきたい。附表②がそれである。各人の記載された月・日を記すにとどめるが、いずれ『門記』が翻刻される事があれば、検索の便に供することが出来ると考えて作製したものである。

結

知恩院内における二つの組織体、すなわちそれは一つは方丈側、一つは門跡側と言えるが、その内の門跡側にスポットを当てて、その組織の成立ちと内部構成の解明の為に、『門記』中より、その記事を検索したのが本論であった。

尊光の時代は、宮門跡としては第二代にあたるが、江戸時代の中では社会全体に組織が完備していく寛文年間を中心としており、門跡組織にとってもその内部が充実していく時期であった。初代良純当時の宮門跡組織は完全に払拭された中で、この尊光の時代は始まるが、それはさらに二代から三代に移行する間の門跡不在時期にあたっても、組織として院家や坊官・家老が存在し続けており、前代良純後の様な状態にはならなかった。門跡不在時期にもなお活躍するのが本論で述べた院家寛了院であり、坊官岩波少進・藺民部卿であり、家老梅嶋頼母なのである。『門記』中にそれらの淵源を充分にたどれた事は、本論における大きな成果であったと言える。

最初に『門記』の信憑性を問うてみたが、叙二品に関する『妙法院史料』中の坊官相互の往復書面の記事は、『門記』が良質な記録である事の大きな証左となった。『妙法院史料』がこれまで公になることなく蔵されていたという事実を踏まえる時、『門記』の信憑性が増すこととなり、その良質さを我々は認識せざるを得ない。良質という観点から『門記』をもう一度眺めなおす時、岩波延庸が記録し続けたこれらの記事の内容が、悉く重要に思えてくる。たとえ宮門跡側にたった視点で『門記』が語られているとしても、尚そのことが『門記』の価値を低減することにはならないと思う。さらにこの寛文頃の記録を持たない知恩院方丈側の具体的な事象についても、『知史』を補完し得ると私は考えている。

では『門記』により得られた事実に即して知恩院宮門跡御殿内部の人員構成と、その歴史的経過をまとめておこうと思う。

御殿の構成組織は、知恩院方丈や役者からなる所謂寺院構成組織とは少し異なった名称を用いる。すなわち、門室を中心として以下、院家・坊官・家老、それに侍中・下部・僧衆・小姓・医者などの名称である。しかもそれは知恩院方丈とは別に独自の組織を構成している。それら構成員に関しては、特に出自の問題に言及しておきたい。門室は天皇家より転進して来たし、院家は堂上家よりの転進である。これらは共に朝廷組織の流れを汲む人と言え、いわゆ

る公家衆と呼ばれる側の人々である。尊光の場合、入室以前には儒者より指導を受けている。覚了院はその入室の折の年令は不明ながら幼少時には大炊御門家の末息としての学問を学んだ事が予想される。次に坊官はと言うと、武田は院の非蔵人出身、佐治は儒者の門弟出身、岩波は照高院官坊官出身であった。岩波には仏教的色彩が見られるかもしれないが、宗派が違えばおよそその規式も異なり、浄土宗という宗派に染まるのに時間がかかった事は予想される所である。浄土宗の側から彼らを見る時、これらの出自はおのずと組織のあり様にも影響を与え得たであろうし、名称の特異性とも相俟って組織の独自性を際立たせるものがあつたであろう。ともあれ『門記』に見る限り、機構としては、組織の勘定役を果たした坊官を中心とした上下関係が整備されていたと考えられる。

さて、尊光時代でのこの宮門跡の体制の時期的変遷を述べておくと、最初の坊官三名体制（佐治・武田・岩波）は組織体としては初步に属し、のちの万治元年からの二名体制（武田・岩波）において各人の役割分担が定まり、寛文二年よりの三名体制（武田・岩波・蘭）は尊光の修学とも関連し、かなり安定して来ている。寛文七年以降の院家及び坊官二名体制（岩波・蘭）ともなると、院家は初步的な歩みを示しながら、それを援助する坊官はまさに安定しており、院家の成長とも相俟って、岩波の動きに見られる様に、宮門跡としての意志をも提示するに至るのである。院家・坊官に終始した感があるが、院家の淵源と坊官の安定期に至る経過は充分述べつくせたと考えている。彼等覚了院・岩波・蘭・梅嶋が、尊光遷化後も次代の尊統に至る迄の門室不在時期の間においても、御殿を守り続けていくこととなる。各人員の力関係・序列等に関しては、本論中に述べた如くであり、今は繰返さないでおく事とする。

この時代に院家覚了院が登場するが、時の左府をもつとめた大炊御門経孝の末息が覚了院となったという事実を『門記』中に見出し得たことは大きな収穫であつたと思つてゐる。

今回は、御殿をめぐる人達を出来る限り把握しようとして『門記』をひもとき、ここに本論を展開し来たつたのであるが、いずれにしても、御殿の内部組織の大概は了解出来たと考えている。この事を踏まえた上で、宮門跡に

おける種々の問題を、今後解明してゆく作業が課題として残った。いずれ稿を改めて、後日を期さねばならないと考えている。
(昭和61年10月5日稿)

註

① 『知恩院文書目録』に収載されていない。本論では出来る限り原文を引用したが、その煩雑さを避ける為にも、その翻刻が待たれるところである。

② 『知史』六六頁。「一、知恩院之事、立置宮門跡、門領各別相定上者、不可混雜寺家、引導仏事等者、定脇住持、如先規、可被執行、於十念者、為結縁、門主自身可有授与事」とある。『知史』には門領千四十五石としてあるが、本論では千石をとる。

③ 『知史』六四三頁～六七七頁。

④ 『史料集』第二卷四九頁。

⑤ 『史料集』第二卷三五二頁～三五四頁。

⑥ 『史料集』第三卷四〇一頁。

⑦ 例えは『史料集』第二卷一二八頁に、同年十一月四日「覺了院殿・帥法印・蘭宮内卿・角田伊織(以下略)」と出てゐる。

⑧ 例えは『史料集』第二卷一二三五頁。

⑨ 『史料集』第三卷二七三頁。

⑩ 『知史』六四八頁。

⑪ 名著普及会本『新校群書類従』第三卷四七一頁。

⑫ 経済雑誌社本『統国史大系統史愚抄』第三卷一八〇頁。

⑬ 国書刊行会本『系図綜覧』所収「詰所系図」三七頁～三八

頁。

⑭ 『妙法院史料』所収。第一卷一一五頁～一二六頁。

⑮ 臨川書店本『歴代殘闕日記』所収。『熙房卿記』(以下『卿記』)。

⑯ 『卿記』五四一頁。

⑰ 例証として『知恩院日鑑』享保二十年五月二十八日の条を引く。「於御殿、多称丸殿、就得度、役者中何某御殿へ被相詰候、則覺了院殿与申候、即刻右得度之為祝儀、御使僧被遣之候」とある。『尊胤親王御参當記』(享保二十年)中に「御殿御児^(多)根丸」とある。享保十八年覺了院は隠居しており同二十年御殿の御児である多称丸が得度をして同名の覺了院を名乗るのである。

⑱ 『京都御役所向大概覺書』上巻二六頁。

⑲ 『公卿補任』第四篇六頁。

⑳ 『同右』第四篇二四頁。

㉑ 『卿記』五三六頁。

㉒ 知恩院蔵、『知恩院文書目録』(以下『目録』)(一)記録篇に収載されていない『堂上用』という記録によると同日条に「覺了院隠居大僧正迂化ニ付、御殿へ御使僧被遣」とある。

㉓ 国史大系本『徳川実紀』第四篇六〇六頁。

㉔ 『実紀』第五篇八〇頁。

㉕ 『卿記』五三六頁。寛文五年三月五日条に「妙法院宮院家日殿

院大僧都亮憲、任権僧正」とある。

②⑥ 『堂上用』以外に『山内用』『末山用』『縁山用』『公辺用』がある。いずれも享保七年以後の抜粋記録となっている。天保十二年迄書き継がれている。

②⑦ 『知史』六四四頁。第一代良純法親王の項に坊官の記事は載せられていない。

②⑧ 『門記』に「此節、洛陽昌三ト云有儒者、従所司代被申付、御読書ノ御指南ニ毎日伺候ス矣」とある。

②⑨ 『目録』になし。知恩院蔵。

③① 『卿記』三五〇頁。但し添書はない。

③② 『卿記』三七四頁。

③③ 『増上寺史料集』第一卷一四九頁。「諸宗寺院下知状」第五条には「他人者勿論、親類之好雖有之、寺院・坊舎女人不可拘置之、但有来妻帯者、可為各別事」とあり、女人について限定された修飾語はない。

③④ 『実紀』第四篇三六四頁。

③⑤ 『卿記』四七八頁。

③⑥ 『卿記』四三一頁。

③⑦ 『目録』になし。知恩院蔵。

③⑧ 『史料集』第二卷一一四頁。

③⑨ 『史料集』第二卷六四頁。

③⑩ 『寛文朱印留』下巻五頁。

④① 『実紀』第四篇五五二頁。

④② 良正院蔵。没年月日と戒名のみの記載である。他の院家・坊官については確認出来ず、書かれなかった様である。

④③ 自治日報社本。『地下家伝』中巻一六三〇頁〜一六四二頁。岩波氏については一六三三頁。

④④ 『妙法院史料』第一卷一二五頁。寛文五年七月二十五日条「聖護院入峯也、日出之比出門之由伝聞間、日出已前ヨリ坊官ノ館、曹谷左京也、伏見通也ニ行テ見物之用意也」とある。

④⑤ 例えば『実紀』第五篇八〇頁。寛文十年八月十四日条に「知恩院門跡尊光法親王のもとへ、酒井雅楽頭忠清・高家吉良上野介義央御使し、帰洛の暇仰つかはれ、銀三百枚・銀さ二百把をくらせ給ひ、院家寛了院に銀廿枚・時服五、家司に銀十枚づゝ下さる」とある。

④⑥ 『知史』は大概、知恩院住職を中心とした記述に終始している。たとえ江戸初期より宮門跡が設置されたとしても、江戸期を通じて、知恩院史の中心はやはり歴代住職の事蹟となっている。住職・六役・山役・行者・侍分という組織が知恩院住職側に存在する。

附表① 『門記』坊官記事一覽（寛文八年～延宝二年）

年号	坊官	岩波	蘭	記事概	要（短文は原文にて「」で示す）	参考
寛文 8 年（1668）		2・15 5・4 5・17 7・5	1月	<p>「京都之儀、民部在京而調之矣」</p> <p>吉良義冬より少進方へ尋ねあり、門主の江戸逗留の有無につき。</p> <p>「院家・少進位階為奏聞御暇、上洛ス」</p> <p>「覺了院、今度始而位階、直叙法眼并少進次第法眼、從門主、関白・伝奏・職事へ以少進被仰入也」</p> <p>院家参内に付、「此時、宣旨之儀、官務へ自職事可被申通也、職事へ百足、少進持参之矣」</p>		<p>蘭在府</p> <p>岩波在京</p> <p>岩波在京</p>
寛文 9 年（1669）	2・22	1・24 2・1 3・1 4・8 4・14 4・15 5・19	4・8 5・20	<p>家綱、仏殿へ御成あり。門主病中の為不座す。「因茲、白書院迄少進被召出」老中より門主の様子を尋ねらる。</p> <p>家綱への年頭礼、名代として覺了院出向く。「付、其次迄、被添少進也、自爾諸方へ御返礼被遣也」</p> <p>門主、家綱と黒書院にて対顔す。「依茲、如左、最院家・坊官・伊織御礼、如例矣」増上寺智哲より少進招かれる。「依仰、翌日方丈へ少進参」</p> <p>尊光療養の為熱海へゆく。「江戸御発興、同十一日豆州熱海へ御着、（略）少進供奉、覺了院・民部御留主乎」</p> <p>尊光湯治見舞状老中より「岩波少進」宛に届く。二通。書状写あり。</p> <p>尊光、老中・吉良義冬へ返礼出す。二通。「岩波少進、裏月日刻付」とあり。</p> <p>右返礼につき岩波少進より各宿中への書状写。</p> <p>尊光湯治帰山に付、家綱への土産、「以少進、被進之」</p> <p>道中人馬朱印状、これ迄の分三通返弁す、「都而三通、吉良迄遣之、御使民部也、残御朱印者、当時不見由申也」</p>		<p>蘭在府</p>

寛文10年 (1670)							寛文9年 (1669)						
8 ・ 15		8 ・ 14					8 ・ 4						
10 ・ 19	10 ・ 18		7 ・ 26	7 ・ 25	7 ・ 21	6月 1月	12月	11 ・ 7	10 ・ 28	7 ・ 26	7 ・ 22	7 ・ 4	
10 ・ 15		7 ・ 26											
<p>「京都年始之御佳例、少進在京而調進之矣」 「御簪望之事、数度、有御内談而、其上、吉良・品川へ以少進、度々及御内談也」 「大沢兵部大輔へ右御願之趣、使少進、被仰入」 「從吉良、少進被呼、昨晚、雅楽頭而之首尾演説也、其切品川へ立寄処ニ演説同前也」 「大沢へ被遣民部、件之儀、頃刻雅楽頭へ被仰達間、可被得其意由、被仰遣也」 「酒井雅楽頭忠清より岩波少進呼ばれる。」「依之少進右之刻限ニ参、則有対面」 「御暇に付、上使来る。」「御前退出以後、表面院家へ銀廿枚・時服五、坊官・家老へ銀十枚宛、被下之」 「御暇に付、登城す。」「供奉院家・坊官・家老何モ御礼申上矣」 「為今度之御礼、江戸へ民部御下シ、御進物等有別記矣」 「当所司代へ使少進、内々ノ儀、委細被仰遣」岩波、所司代に、これまでの成行きを答える。 「從右之首尾、板倉内膳正へ以少進、御錢別被遣」</p>							<p>増上寺智哲へ尊光出向く。「内々之儀」を仰せあり。「依茲、翌日、自方丈少進被呼」少進、その内容を詳しく答える。 「伝通院へ以少進、右増上寺へ被仰入儀并増上寺御請之品等被仰遣矣、御最之由、御受也」 「吉良へ右ノ兩寺へ被仰入儀、以少進被仰遣也」 「増上寺へ入院、銀五枚・兩樽双肴持参乎、并院家・坊官・家老、各へ有祝儀乎」 臨時合力米の延引につき、「吉良迄少進内証ニテ尋之」以後は勝手次第に吉良へ申入すれば良いこととなる。 「御入内之上使、松平美作守・品川式部大輔被仰付、上洛乎、依之、為御使、少進被登」 「京都歳暮之佳例、少進在京而調進之矣」</p>						
岩波在京 岩波在京 岩波在京							岩波在京 岩波在京 岩波在京						

延宝元年 (1673)					寛文12年		寛文11年			年号		
11 ・ 22	5 ・ 20			1 ・ 14						坊官		
12 ・ 19	8 月	2 ・ 24	2 ・ 19	2 ・ 10	1 ・ 14	12 月	1 ・ 15	8 月	5 ・ 20	4 ・ 8	3 月	岩波
							1 ・ 15				蘭	
<p>「為年始之御使、少進江戸へ御下シ矣、御書・御進物等如例矣、但例年々始御書之留」 「増上寺へ御書、或へ從院家仰状、其外、伝通院・靈巖寺・新知恩寺へ者、從坊官仰状也」 中井主水、参勤につき「少進自江戸登ル道中迄、急可登由、飛脚被遣、依之少進道中急、十六日上着々矣」 「伝奏、日野・中院へ以少進、巨細被仰遣処ニ委細及承知」 「亦伝奏へ少進被遣之処ニ、一昨廿二日所司代へ尋申処ニ、最モ雖莫失念、洛外ニ御相応之地、依無之延引之由」 「輪門主、御上京、草津迄、以坊官、御菓子被進之也」 「輪門主ノ役者、円寛院方迄、以少進、内々御願之段、并御条目亦先年之御訴状等、被遣之」 輪門主、江戸へ還御にあたり、「如例、以坊官、御菓子被進之、最諸方・諸門主如此矣」 「内々御願之儀、以少進、小笠原丹波守^{附新院}有御内談之処」</p>					<p>「年始之為御使、江府へ民部被遣」 右記事但書中に、「但、去春少進下ル節、自雅楽頭、以吉良、少進迄、年始之御使之儀、勅使為同時者、表向之事也」 「中井主水方へ被遣少進、内々御願之儀、御内談被遊也」</p>					記事概要 要(短文は原文にて「」で示す)		
					岩波上落					岩波下向	参考	

延宝2年(1674)

6 4	6 3	5 28	5 27	5 23	5 14	5 13				4 23	2 27	2 5	1 27	1 26	1 25	1 13	1 13
							5 10	5 1							1 15	1 13	
<p>「所司代へ以少進、江戸へ年頭之御使、如例被遣」</p> <p>「伝奏衆へ以少進・民部、内々御願之儀并東照宮御条目被人披見、巨細被仰入」</p> <p>「年始之御使、江戸へ民部被下乎」</p> <p>「開山前、無御焼香、亦伝奏衆へ少進被遣処ニ留主也」</p> <p>「從伝奏衆、少進被呼」</p> <p>「伝奏衆へ右之通、如何被存哉乎、以少進、有御尋処ニ、中院巫相被申者」</p> <p>「伝奏衆、以少進、此度各江府へ参向幸也」</p> <p>「朝、御領分、村ノ高付、所司代へ少進持参矣」</p> <p>「少進為御使、江戸へ発足乎」内々の願が老中に披露されるかどうか尋ねの為。増上寺・門中へ隠密の為「暫嶋野良順ニ蟄居矣」</p> <p>毘沙門堂公海へ新院皇子六歳宮入室す。尊光祝儀を進上す。「御使民部、以後有御返礼矣」</p> <p>源光院下向の暇乞の折、門中評儀の内容を「以民部、御尋之処」源光院、これに答える。</p> <p>「少進へ所司代有対面而、某シ今度下着早々年来御願之通、老中へ申入」</p> <p>「伊勢屋与右衛門云御用人方、少進宿替」京よりの飛札により「依之少進弥々逗留矣」</p> <p>「三僧江戸へ下着乎、依之、少進品川迄出向シ京・江戸之様子相談之」</p> <p>「幸、知門主之坊官、岩波少進、唯今、御当地ニ有合候間、申遣、追付可懸御目由、申退出矣」</p> <p>「様子知申迄、少進江戸ニ逗留可仕由」の飛脚あり。岩波、演説の為、増上寺・伝通院へ参る。</p> <p>「少進、唯今迄者、旅宿雖為蟄居、右之首尾故、御字寮へ移住矣」</p> <p>「稻葉濃州へ御条目之写、円覚院持参之処」として、書付中に「知恩院御門跡坊官岩波少進于今逗留」</p>																	
所司代在府中										岩波下向					菌下向		

附表② 『東山門室記録』登場人物一覧表（数字は記事の日付）

年号 1600	門室 尊光	院 家		坊 官			家 老		僧 衆		その他 (小姓・侍中・ 下部・医者)	方丈	参 考 『実紀』	『卿記』 位階
		名	覚了院	名	岩 波	今井 佐治	名	梅嶋 角田	了山	名他				
承応 3 '54	4.6 親王宣下 良賢 10歳				延庸	了休 4.6	三省 4.6	頼母	伊織			35代 勝	ゴチック は院家、家 坊官、家ま れる	
明暦元 '55	11歳				9.1 召出	8.6 追放 27歳	8.6 追放 8月 帰門 39歳					誉 旧		
明暦2 '56	5.8 入室得度 7.1 改衣 12歳			5月	5.8 2.8 28歳	玄了 召出 6月	5.8 8月 40歳					応	6.19 7.1	8.3 玄了 法橋
明暦3 '57	12.6 下向 台徳院27回 忌の為 13歳			1.6 1.25 12.6 12.8	9月下旬 10.25 12.6 29歳	12.6	5.25 没 41歳				12.6 侍 永井五 兵衛 留主	36代 帝	10.1 12.19 12.25	12.5 延庸 法橋
万治元 '58	2.26 帰洛 14歳			1.19 2.5 夏	1.24 2.5 4.1下向 30歳	1.24 2.5 9.15					2.5 医者長文庵	誉 尊	1.6 1.24 1.28 2.6 2.14	
万治2 '59	15歳	1.1 1.2 1.3		1.1 1.2 1.3 1.10	4月下旬 31歳							空		

年号 1600	門室 尊光	院 家		坊 官				家 老			僧 衆	その他 (小姓・侍中・ 下部・医者)	方丈	参 考 『実紀』	『卿記』 位階	
		名	覚了院	名	岩 波	武田	藺	名	梅嶋	角田	了山					名他
万治 3 '60	16歳	8. 27			6. 16 12. 6	4 月 6. 16 8 月 9 月			11月			6. 16 小姓 山田 斉之助	36代 帝 尊 空		11. 14 立白 法橋	
寛文元 '61	17歳				9 月下向		藺 広豊									
寛文2 '62	18歳	3. 25 下向 修学の為			4. 14 12月	3. 25 4. 17 12月 京	3. 25 4. 17 5. 1	4. 17				3. 25 一心院故 西 留主			4. 3 4. 8 4. 13 4. 14 4. 19 5. 12 5. 24 6. 21 10. 6 11. 5 11. 29 12. 14	8. 10 玄了 法眼
寛文3 '63	19歳	5. 9 日光参拝			5. 3 留主 8. 5 10月 12. 晦 35歳	5. 3供 12. 晦 京	1. 27 京 5. 3 京					8. 5 侍 永井五 兵衛		37代 玄 尊 知	1. 5 4. 11 4. 28 6. 1 9. 3 11. 17	
寛文4	6. 25 加行 受法		11月 入室 受戒の内通	1. 16 1. 24 2. 16	1. 24 3 月 京 8. 15	1. 24 10月 11月 12月 京	1. 24	1. 16	1. 24	1. 24	閏 5 月	1. 16 僧衆 1. 16 小姓・侍 中・下部 1. 24 嶋野良順			1. 6 1. 24 1. 25 2. 2 4. 14	1. 24 武田良 泉 岩波延 庸

'64	20歳				法橋 36歳	法眼	法橋					鑑	5.24 6.25 9.22 11.20	蘭広豊 『門記』 による
寛文 5	21歳				6.25 6.27 7.12 11. 8 11. 8 11.22 11.24 37歳	1. 2 京 6.25 6.27 6.28 7.12 12月					44歳		1. 6 5.18 5.25 10. 8 11.24	7.12 尊光 二品 []
寛文 6	22歳	3.17 帰洛	3.28院家と して入室初 参, 梅丸	5.20 11月	2.晦 3. 1 3. 8 上 3. 9 38歳	正月 4月	2.晦		2.晦	秋		37代	1. 6 2.30 3. 1	『卿記』 以下なし
寛文 7	23歳	3.27 下向 修学の為	閏2.22得度 覚了院超孝 4.15		2月 3.27 4.11 4.15 39歳	2月 3.27 5.14 没 4.15 12月 京	2月 4.10 4.15	3.25 4.15	3.25	閏2.22 5.21	閏2.22 観心	誉	4.11 4.15 4.16 5.18	
寛文 8	24歳	2.1 火事 寮炎上	1. 1 5. 4 5.26 6.27 7. 5 7. 9 11.28	5.17法眼	岩 波 2.15 5. 4 5.17 法眼 7. 5 40歳	1月 京		12.13			5.27 医者 良順 ・良庵 8.12 医者 井上 玄微・玄快	知 鑑	1. 6 1.24 2.17	5.17 覚了院 法眼 近庸 法眼
寛文 9	25歳		1. 1 1. 24 2.22 8. 4 8.12	2. 1 8 留主	2.22 8. 4	1.24 3. 1 4.14 7. 4 7.26 11. 7	2. 1 4. 8 5.19 7.22 10.28 12月 41歳	4. 8 留主 5.20	8. 4	1. 6	2.22		1.24 2.22 4. 1 5.16 5.19 9.11	
'69														

年号 1600	門室 尊 光	院 家		坊 官			家 老			僧 衆		その他 (小姓・侍中・ 下部・医者)	方丈	参 考 『実紀』	『卿記』 位階
		名	覚了院	名	岩 波	園	名	梅嶋	角田	了山	名他				
寛文 10 '70	9.7 帰洛 26歳	8.14 8.15 9.18		8.14 8.15	1月 6月 7.21 7.25 7.26 10. 2 10.18 10.19	7.26 10.15	8.14 8.15			9.20		8.26 侍分6人 下部3人 10.20 侍衆	37代	1. 6 1.24 5.28 7.24 8.14 8.15 8.22	
寛文 11 '71	 27歳				3月 4. 8 5.20 8月					50歳			玄 誉		
寛文 12 '72	 28歳				1.15 12月	1.15				51歳			知		
延宝元 '73	 29歳	1.14		1.14 5.20 11.22	1.14 2.10 2.19 2.24 8月 12.19					1. 9 讃誉 了山 没 52歳		11.22 石川八良 左衛門	鑑		
延宝 2 '74		2.27 7.12 7.27 11. 1 11. 4 11. 6 11.27	2.27 7.11 大僧都	7.27 11.17 11.27	1.13 1.25 1.26 1.27 2. 5 2.27 4.23 5.13 5.14 5.23 5.27 5.28 6. 3 6. 4 6.13 6.19 8.20 9.23	1.12 1.13 1.15 5. 1 5.10 7.12 10.25 10.26 10.28	5.10 7. 晦 7.27 10.26	9. 3 10.21	順応	6.19 観応 7.20 棕百	4.23 医者 嶋野 良順 11.27 小姓 12.9 下部三人	38代 玄 誉 万		7.11 覚了院 大僧都	

				10. 1 10. 28 11. 25	10. 25 11. 14 12. 28	11. 18							無		
	延宝3'75	閏4. 24 下向修学の為	30歳			46歳									
			31歳			47歳								5. 8 5.11 5.21 9.15 9.16 9.28	

